原 著

妊娠先行結婚と妊婦の対児感情・母親役割獲得・ 夫婦関係との関連

Feelings toward babies, maternal behavior and marital relations in women whose pregnancy preceded their marriage

盛 山 幸 子 (Sachiko SEIYAMA)*
島 田 三恵子 (Mieko SHIMADA)*

抄 録

目 的

妊娠先行結婚をした夫婦の特性を明らかにし、妊娠先行結婚と、妊娠期における母親の対児感情、母親役割獲得、及び夫婦関係との関連を明らかにする。

対象と方法

調査の同意を得られた妊娠末期の母親198名(有効回答率67.1%)とその夫173名(有効回答率58.6%)を対象とした。妊婦健診に来所した初産婦に調査票を配布し、留置法あるいは郵送法で回収した。調査項目は対象の属性及び背景等、対児感情、母親役割行動、夫婦関係である。

結 果

妊娠先行群の母親は41名(20.7%),そのうち25歳未満は21名であった。妊娠先行群の母親($p < 0.001$)とその夫($p < 0.01$)の年齢は結婚後妊娠群よりも若く、学歴は中学卒業・高校中退者が多かった($p < 0.01$)。妊娠先行群の母親の結婚の契機は7割が「妊娠したため」、5割が「もともと結婚予定だった」。妊娠先行群の母親の児への接近感情は 28.3 ± 8.1 点で結婚後妊娠群との差は認められなかった。しかし、25歳未満の妊娠先行群では児への愛着的な感情は有意に低かった($p < 0.05$)。児への回避感情は妊娠先行群の方が低かった($p < 0.05$)。母親役割行動の合計得点は結婚後妊娠群との差はなかったが、「規則正しい生活」($p < 0.05$)、「母親学級等への積極的な参加」($p < 0.05$)は妊娠先行群の方が少なかった。25歳未満の妊娠先行群の母親は「児のことを考えると嬉しい」気持ち($p < 0.05$)や「児に話しかける」($p < 0.01$)ことが少なかった。妊娠先行群の夫婦の愛情は結婚後妊娠群との差は認められなかった。しかし、25歳未満の妊娠先行群の母親の夫への愛情は 52.7 ± 12.0 点で結婚後妊娠群の母親よりも低かった($p < 0.05$)。

結 論

妊娠先行群の母親の児への接近感情や母親役割行動は結婚後妊娠群との差がなかった。妊娠先行群の母親の児への回避感情は結婚後妊娠の母親よりも低かった。妊娠先行群の夫婦の愛情は結婚後妊娠群との差がなかった。しかし、25歳未満の妊娠先行群の母親は児への愛着的感情や夫への愛情が低かった。

キーワード：妊娠先行結婚、対児感情、母親役割行動、夫婦関係

*大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻 (Osaka University, Graduate School of Medicine, Division of Health Science)

2008年5月7日受付 2008年12月4日採用

Abstract

Purpose

This study explored the characteristics of women with conceptions that preceded marriage and described their feelings toward babies, maternal behavior and marital relations.

Methods

A quantitative cross-sectional study was conducted by self-reported questionnaire among 198 (response rate 67.1%) primigravid women at the end of pregnancy and 173 (response rate 58.6%) husbands of those women. We distributed the questionnaire to pregnant women who were consulting an obstetrics clinic of a general hospital and collected census forms by mail or personal return. Census forms for these subjects consisted of background, attitude toward babies, maternal behavior, and marital relations, and the questionnaire for the husbands consisted of attitude toward babies, maternal behavior, marital relations and so on.

Results

There were 41 women with premarital pregnancy (20.7%). Twenty-one of these women were under 25 years old. The mean ages in the premarital pregnancy group for both the pregnant women ($p<0.001$) and their husbands ($p<0.01$) were significantly younger than control group, junior high school graduates or high school dropouts comprised significantly higher percentage than that in the control group ($p<0.01$). A key factor behind their decision to marry in the premarital pregnancy group were 'married because of pregnancy' was reported by about 70%, 'Planned marriage' was reported by about 50%. The score for feelings toward babies in the premarital pregnancy group was 28.3 ± 8.1 , and there was no significant difference between the two groups for feelings toward babies 'attachment'. However, scores for women in the premarital pregnancy group who are under 25 years old were lower than those of the control group. Negative feelings toward babies in the premarital pregnancy group were lower than those of the control group ($p<0.05$). Overall maternal behavior score did not significantly differ between the two groups. But in the subclassification 'I lead a well-regulated life' ($p<0.05$), 'I aggressively participate in, mothers' classes and parents' classes and so on' ($p<0.05$), scores were significantly lower than those in the control group. In women who were under 25 years old 'I am happy when I image my baby' ($p<0.05$), 'I often talk to my baby' ($p<0.01$) were lower than those in the control group. There was no significant difference between the two groups regarding marital relations. Particularly among women under 25 years old, wives in the premarital pregnancy group showed on lower marital relations score than that in the control group.

Conclusion

There was no significant difference between the two groups for feelings toward babies 'attachment', maternal behavior and marital relations. Negative feelings toward babies in the premarital pregnancy group were lower than those in the control group. Among women under 25 years old feelings toward babies 'attachment' and marital relation scores of their husbands were lower than those in the control group.

Key Word: Pregnancy preceding marriage, Feelings toward babies, Maternal behavior, Marital Relations

I. 緒 言

1. 研究の背景

わが国では、10年ほど前から妊娠が先行する結婚、'妊娠先行結婚'が増加している。2005年のデータ(厚生労働省)では結婚全体の26.7%、4人に1人は妊娠先行結婚である。これは、25年前の2倍に増加している。そして、妊娠先行結婚の割合を母親の年齢階級別にみると、2005年には「15～19歳」が8割、「20～24歳」6割、「25～29歳」2割、「30歳以降」1割となっており、年齢層が若くなるほど多くなっている。海外でも、意図しない妊娠は20歳未満の若い妊婦に多く(Pulleyら, 2002)、意図しない妊娠での妊娠期間中のストレスや抑うつレベルがより高いことが報告されている

(Messerら, 2005)。また、日本でも、1995年の調査では、約4人に1人は望まない妊娠での出生であり、望まない妊娠で出生した子どもは2～3歳の幼児期早期に情緒的な引きこもりや攻撃的・破壊的行動を示していることが報告されている。そして、望まない妊娠をした母親は、精神的健康に関する訴えをより多く持っている(福井ら, 1999)。

このように、妊娠先行結婚は意図しない妊娠の場合もあり、妊娠と結婚を同時に迎え出産に至るため、妊婦本人の心理社会的準備が不十分であり、また生活の大きな変化が生じる。夫自身にも同様に大きな変化が考えられる。そのような中、妊婦は精神的な余裕を持つことが困難となり、生活の変化によるストレスを抱えながら妊娠生活を送り出産に至るため、子どもに

対する愛着形成や、母親役割の獲得に何らかの影響があるのではないかと推測される。そして、計画外妊娠の場合、結婚の満足度が低下する(Coxら, 1999)ことから、妊娠を契機に結婚に至る妊娠先行結婚の夫婦関係が懸念される。近藤ら(2005)は妊娠期における妊娠先行結婚の母親への児への愛着には関連がないことなどを報告している。しかし、望まない妊娠では、妊娠期には不安やストレスがより多くなることなど母親のメンタルヘルスが阻害されやすいことが指摘されており(Messerら, 2005; 近藤ら, 2005; Grussuら, 2005; 安藤ら, 2006), 妊娠に対する受容もスムーズにされないとしている(Coxら, 1999)。また、妊娠の受容は児への愛着形成に影響するとの報告もある(成田, 1993; 榮, 2004; 大日向, 1998)。

これまでの愛着や母親役割の獲得、夫婦関係に関する研究では、結婚、妊娠と出産順序については明確にされておらず、妊娠先行結婚に関する研究は少ない。

そこで、現在、妊娠後に結婚をする夫婦が増える中、妊娠先行結婚をした夫婦の特性を明らかにし、妊娠先行結婚の母親の対児感情、母親役割行動の獲得、夫婦関係への影響を検討する目的で、本研究を行なった。

II. 用語の操作的定義

1. 「妊娠先行結婚」とは、結婚(入籍)の前に妊娠が先行した結婚であり、その母親の群を「妊娠先行群」とした。
2. 「結婚後妊娠」とは、結婚(入籍)後に妊娠した結婚とした。
3. 「対児感情」とは、児に対し抱く感情であり、花沢(1992)による定義と同義とした。愛着的で児を肯定し受容する方向の感情を接近感情とし、嫌悪的な児を否定する方向の感情を回避感情とした。
4. 「母親役割行動」とは、本研究では母親としての役割意識と行動とした。母親役割を獲得するということは、気持ちのみでなく、実際に行動に伴っていることが重要であると考え、母親役割意識と行動の両面を含め母親役割行動とした。親の意識や行動面を含め、児を産み育てる役割、健全な母子関係を形成するための親の意識の高まりや行動の遂行を母親役割の獲得とした。

III. 研究方法

1. 対象

妊娠末期の初産の母親とその夫に対し調査した。大阪府内の総合病院の産科外来に來所した初産の母親で、調査協力に同意の得られた妊娠末期の母親295名に調査票を配布した。そのうち、未入籍群4名を除く、母親198名(有効回答率67.1%)、夫173名(回収率58.6%)を対象とした。

2. 方法

1) 調査施設：大阪市内の総合病院であるY病院

2) 対象者の抽出方法：上記の施設の外来受診時に、対象となる母親に対し調査協力依頼文書を用いて研究の概要を説明し、研究協力を依頼した。そして、研究参加の意思を示した母親に対して調査票を配布した。夫への調査協力依頼文書と調査票は母親が持ち帰り、自宅で夫に任意回答していただいた。回収は、留置き法と郵送法のどちらかを対象者が選択した。

3) 調査内容：調査項目に関しては、母親の調査項目は対象の属性及び背景、妊娠出産の援助者、結婚の契機、計画妊娠の有無、妊娠判明時の気持ち、母親役割行動の項目、対児感情評定尺度の28項目、及び夫婦関係尺度10項目で構成されている。夫の調査項目は計画妊娠の有無、妊娠判明時の気持ち、対児感情、及び夫婦関係尺度で構成されている。

(1) 対児感情

花沢(1992)が開発した対児感情評定尺度を使用した。児を思い浮かべた時にどのような感じがするかという形容詞を28項目挙げ、児に対する愛着的感情・肯定し受容する方向の感情を接近感情、嫌悪的感情・児を否定し拒否する方向の感情を回避感情としており、信頼性・妥当性が確認されている。採点は、「非常にそのとおり」を3点、「そのとおり」を2点、「少しそのとおり」を1点、「そんなことはない」を0点とし、接近感情14項目の合計得点から接近得点を、回避感情14項目の合計得点から回避得点を求めた。また、回避得点を接近得点で除した拮抗指数を求めた。拮抗指数は指数が高いほど、両感情は強く拮抗していることを表す。本研究の対象者におけるCronbachの α 係数は、母親の接近得点では0.842、夫では0.853、母親の回避得点では0.723、夫では0.767であった。

(2) 母親役割行動項目

妊娠期は児に対する直接的な養育行動を伴わな

いため、母親役割行動の項目は先行研究(大日向, 1988; 大塚, 1987; 常盤, 2003; 佐々木, 2004; 三澤, 2004a; 三澤, 2004b)を参考に独自に作成した。母親役割行動は、母親としての役割を担っていく上で母親としての意識や感情面と同時に、実際に行う努力行為が重要となってくると考え、心理的側面と行動的側面の2側面で項目を作成した。項目の作成は助産学研究に指導を受けながら行うとともに、項目の内容妥当性については助産学研究者と助産学領域の大学院生5名で検討し、修正を経て作成した。項目は全部で19項目あり、「非常によくあてはまる」から「全くあてはまらない」までの6段階とした。逆転項目は点数を逆にして計算し質問1項目につき最高6点、最低1点とし、「嗜好品」の項目は嗜好品なしの場合7点とした。得点が高いほど母親役割行動がとれていることを表す。本研究の対象者におけるCronbachの α 係数は0.759であった。

(3) 夫婦関係

菅原(1997, 2002)のMarital Love Scaleを使用した。妻と夫、お互いへの愛情の程度は相手を思いやり助けることに反映すると考えた。内容は10項目からなり、尺度の信頼性・妥当性は確認されている。評定は1「全くあてはまらない」～7「非常によくあてはまる」の7段階である。合計得点は10点から最高70点で、得点が高いほど妻は夫への、夫は妻への愛情が高いことを表す。本研究の対象者におけるCronbachの α 係数は、母親では0.910、夫では0.833であった。

5) 分析方法: 分析は、社会統計ソフトSPSS12.0J for Windowsを用いて行った。妊娠先行群と結婚後妊娠群との比較の際、度数の比較には χ^2 検定またはFisherの直接確率を用い、平均値の比較には対応のないt検定を用いた。また、妊娠先行結婚は増加傾向にあり、特に年齢層が若くなるほど多く、25歳未満で妊娠先行結婚の割合が半数以上を占めるため、年齢区分の基準を25歳とし、25歳未満、25歳以上の年齢区分による分析も行った。

3. 倫理的配慮

母親と父親それぞれに調査協力依頼文書を作成し、調査者の氏名・連絡先・研究の趣旨および匿名性を確保する旨等を表記し調査依頼時に使用した。調査の趣旨については調査協力依頼文書を用いて口頭で説明し、同意を得た母親とその夫に対して調査票と返信用封筒を手渡した。回収は留置き法あるいは郵送法を対象者

が選択した。また、本研究は大阪大学保健学科倫理委員会、Y病院倫理委員会の承認を得て実施した。

IV. 結 果

1. 妊娠先行結婚の夫婦の特性

1) 妊娠先行結婚と結婚後妊娠の内訳

対象者のうち、妊娠先行群は41名(20.7%)であり、結婚後妊娠群は157名(79.3%)であった。

2) 対象の属性

対象の年齢は妊娠先行群25.9歳、結婚後妊娠群31.0歳で、妊娠先行群の方が有意に若かった($t=5.89, p<0.001$)。このうち、25歳未満は28名、25歳以上は170名であった。学歴は中学校卒業・高校中退と高等学校卒業以上の2区分で比較すると、中学校卒業・高校中退の人が妊娠先行群に有意に多かった(Fisher's $p<0.05$)。調査時の妊娠週数、就業の有無、及び健診回数は結婚後妊娠群との有意差は認められなかった(表1)。

3) 家族の背景

夫の年齢は妊娠先行群の方が結婚後妊娠群より有意に若かった($t=3.52, p<0.01$)。また、夫の学歴は中学校卒業・高校中退の人が妊娠先行群の方に有意に多かった(Fisher's $p<0.01$)。家族形態は複合家族の割合が妊娠先行群に有意に多かった($\chi^2=17.72, p<0.001$)。夫の職業では、定職に就いている夫は妊娠先行群の方が有意に少なかった(Fisher's $p<0.01$) (表1)。

4) 援助者

「妊娠出産の援助者」は妊娠先行群では26名(66.7%)が夫、12名(30.8%)が実母であった(無回答2名除く)。結婚後妊娠群でもほぼ同様に、夫98名(64.5%)、実母46名(30.3%)であった(無回答5名除く)。妊娠先行群と結婚後妊娠群ともに夫と実母で9割を占め、結婚後妊娠群との有意差は認められなかった。

5) 結婚の契機(複数回答)

「もともと結婚予定であった」と答えた人が最も多く137名(全対象者の69.2%)で、このうち妊娠先行群は20名(48.8%)に対し、結婚後妊娠群は117名(74.5%)であった。次いで「妊娠したために結婚することになった」と答えた29名(全対象者の14.6%)で、このうち妊娠先行群は28名(68.3%)であった。「時期が適当だったから」と答えた人が28名(全対象者の14.1%)で3番目に多く、妊娠先行群では0名であった。「もともと結婚予定であった」人は結婚後妊娠群で有意に多く

表1 対象の属性・家族の背景

	妊娠先行群 (n=41)	結婚後妊娠群 (n=157)	合計 (n=198)	検定
年齢 (平均±SD) (range)	25.9±5.2 (19-39)	31.0±4.1 (23-42)	30.0±4.8 (19-42)	***
調査時の妊娠週数 (平均±SD) (range)	32.5±3.2 (28-40)	32.0±3.4 (28-40)	32.1±3.4 (28-40)	n.s.
健診回数 (平均±SD) (range)	9.3±2.9 (5-17)	9.1±2.7 (1-16)	9.1±2.8 (1-17)	n.s.
就業の有無 [2区分]				
仕事あり	15 (40.5%)	60 (39.2%)	75 (39.5%)	n.s.
仕事なし	22 (59.5%)	93 (60.8%)	115 (60.5%)	
合計	37 (100.0%)	153 (100.0%)	190 (100.0%)	
学歴 [2区分]				
中学卒業・高校中退	5 (12.2%)	4 (2.6%)	9 (4.6%)	*
高校卒業以上	36 (87.8%)	151 (97.4%)	187 (95.4%)	
合計	41 (100.0%)	155 (100.0%)	196 (100.0%)	
夫 (パートナー) 年齢 (平均±SD) (range)	28.7±5.7 (19-46)	31.8±4.8 (20-46)	31.1±5.1 (19-46)	**
夫 (パートナー) の職業 [2区分]				
定職あり	34 (85.0%)	150 (96.8%)	184 (94.4%)	**
定職なし	6 (15.0%)	5 (3.2%)	11 (5.6%)	
合計	40 (100.0%)	155 (100.0%)	195 (100.0%)	
夫 (パートナー) の学歴 [2区分]				
中学卒業・高校中退	7 (19.4%)	5 (3.8%)	12 (7.1%)	**
高校卒業以上	29 (80.6%)	128 (96.2%)	157 (92.9%)	
合計	36 (100.0%)	133 (100.0%)	169 (100.0%)	
家族形態				
核家族	30 (76.9%)	147 (95.5%)	177 (91.7%)	***
複合家族	9 (23.1%)	7 (4.5%)	16 (8.3%)	
合計	39 (100.0%)	154 (100.0%)	193 (100.0%)	

妊娠先行群と結婚後妊娠群との比較 unpaired t-test または χ^2 検定

***: $p < 0.001$, **: $P < 0.01$, *: $p < 0.05$ n.s.: not significant

($\chi^2 = 9.88$, $p < 0.01$), 「妊娠したために結婚することになった」人は妊娠先行群に有意に多かった (Fisher's $p < 0.001$)。

妊娠を契機に結婚した妊娠先行夫婦28名がもともと結婚予定だったか否かに着目すると, 「もともと結婚予定でなかった」人は8名 (28.6%, 妊娠先行夫婦全体の19.5%) が「妊娠を契機に結婚することになった」と回答していた。

6) 妊娠判明時の気持ち

結婚後妊娠群の母親の方が妊娠先行群よりも妊娠判明時に「とても嬉しかった」と有意に多く答えていた ($\chi^2 = 20.37$, $p < 0.001$)。夫も同様の結果であった ($\chi^2 = 9.16$, $p < 0.05$)。また, 「ありがたい」と答えた人は結婚後妊娠群の母親で有意に多く ($\chi^2 = 4.69$, $p < 0.05$), 「悩んだ」 ($\chi^2 = 16.26$, $p < 0.001$) と答えた人が妊娠先行群の母親で有意に多かった。

2. 対児感情, 母親役割獲得, 夫婦関係との関連

1) 対児感情

母親の接近得点は結婚後妊娠群との有意差が認められなかった。回避得点は妊娠先行群の方が有意に低かった ($t = 3.17$, $p < 0.01$)。拮抗指数も妊娠先行群の方が有意に低かった ($t = 2.24$, $p < 0.05$)。父親では, 接近得点, 回避得点, 拮抗指数は結婚後妊娠群との有意差が認められなかった (表2)。

25歳未満では, 児への肯定的な感情を示す接近得点は, 妊娠先行群が結婚後妊娠群よりも有意に低かった ($t = 2.77$, $p < 0.05$)。25歳以上では, 2群に差は認められなかった。

2) 母親役割行動

母親役割合計得点は妊娠先行群と結婚後妊娠群とに有意差は認められなかった。しかし, 「規則正しい生活をしている」 ($t = 2.50$, $p < 0.05$), 「母親学級や両親学級に積極的に参加している」 ($t = 2.51$, $p < 0.05$) の得

表2 対児感情

	妊娠先行群	結婚後妊娠群	合計	検定
母親の対児感情				
25歳未満の母親	(n=21)	(n=7)	(n=28)	
接近得点	27.8±7.4	33.3±2.9	28.8±7.1	*
回避得点	6.2±5.1	8.0±2.5	6.7±4.4	n.s.
拮抗指数	21.1±15.3	24.1±6.9	22.8±13.8	n.s.
25歳以上の母親	(n=20)	(n=150)	(n=170)	
接近得点	28.8±9.0	28.7±6.4	28.8±6.7	n.s.
回避得点	5.6±2.3	8.6±4.9	8.2±4.8	*
拮抗指数	23.4±20.3	29.9±18.3	29.3±18.6	n.s.
母親の合計	(n=41)	(n=157)	(n=198)	
接近得点	28.3±8.1	28.9±6.4	28.8±6.7	n.s.
回避得点	5.8±3.8	8.5±4.8	8.0±4.8	*
拮抗指数	22.3±17.8	29.6±18.0	28.2±18.1	*
夫の対児感情				
25歳未満の夫	(n=18)	(n=5)	(n=23)	
接近得点	26.3±9.2	30.4±2.3	27.2±8.3	n.s.
回避得点	8.2±5.3	6.2±4.9	7.7±5.2	n.s.
拮抗指数	33.6±19.4	20.6±16.5	30.6±19.2	n.s.
25歳以上の夫	(n=19)	(n=131)	(n=150)	
接近得点	27.7±6.6	27.4±6.9	27.5±6.9	n.s.
回避得点	6.9±4.6	8.1±5.2	7.9±5.1	n.s.
拮抗指数	26.6±18.7	29.9±22.3	29.5±21.9	n.s.
夫の合計	(n=37)	(n=136)	(n=173)	
接近得点	27.0±7.9	27.5±6.8	27.4±7.0	n.s.
回避得点	7.5±4.9	8.0±5.1	7.9±5.1	n.s.
拮抗指数	29.9±19.0	29.5±22.2	29.6±21.5	n.s.

妊娠先行群と結婚後妊娠群との比較 unpaired t-test

*: $p < 0.05$ n.s.: not significant

点は結婚後妊娠群の方が有意に高かった(表3)。

25歳未満の妊婦では、「子どものことを考えると嬉しい」($t = 2.63, p < 0.05$)の項目は妊娠先行群 5.6 ± 0.8 , 結婚後妊娠群 6.0 ± 0.0 で、「児に話しかけている」($t = 3.716, p < 0.05$)の項目は妊娠先行群 3.7 ± 1.2 , 結婚後妊娠群 5.0 ± 0.6 で、いずれも妊娠先行群が結婚後妊娠群よりも有意に低かった。25歳以上ではどの項目も2群に有意差は認められなかった。

3) 夫婦関係

妻の夫婦関係合計得点は結婚後妊娠群との有意差が認められなかった。しかし、下位項目の「人間として深く尊敬している」は妊娠先行群の方が有意に低かった($t = 2.30, p < 0.05$)。夫の夫婦関係合計得点も結婚

後妊娠群と有意差が認められなかった。(表4)。

25歳未満の妻の夫婦関係合計得点は妊娠先行群 52.7 ± 12.0 点, 結婚後妊娠群 61.4 ± 4.4 点で妊娠先行群の方が有意に低かった($t = 2.758, p < 0.05$)。下位項目の「愛していると実感する」は妊娠先行群 6.3 ± 0.9 点, 結婚後妊娠群 7.0 ± 0.0 点で妊娠先行群の方が有意に低かった。夫の夫婦関係合計得点は2群で有意差は認められなかった。しかし、下位項目の「妻の幸せが最大の関心である」は妊娠先行群 5.9 ± 1.4 点, 結婚後妊娠群 7.0 ± 0.0 点, 「妻の味方でいたい」はそれぞれ 6.3 ± 1.0 点, 7.0 ± 0.0 点で妊娠先行群の方が有意に低かった。25歳以上では、妊娠先行群と結婚後妊娠群とに差は認められなかった。

表3 母親役割行動

	妊娠先行群 (n=41)	結婚後妊娠群 (n=157)	合計 (n=198)	検定
親になる実感がある	4.5± 1.2	4.5± 0.9	4.5± 0.9	n.s.
親になる責任がある	5.0± 0.9	5.2± 0.9	5.2± 0.9	n.s.
親になることが精神的に負担†	4.4± 1.4	4.0± 1.2	4.1± 1.3	n.s.
妊娠出産が経済的に負担†	3.6± 1.5	3.8± 1.3	3.8± 1.4	n.s.
子育てが経済的に負担†	3.6± 1.4	3.7± 1.3	3.7± 1.3	n.s.
子どもの世話が楽しみ	5.1± 0.9	4.9± 0.9	5.0± 0.9	n.s.
子どものことを考えると嬉しい	5.6± 0.7	5.6± 0.7	5.6± 0.7	n.s.
自分のしたいことが制限されストレス†	3.9± 1.4	4.0± 1.4	3.9± 1.4	n.s.
夫との生活変わり残念†	4.5± 1.2	4.6± 1.4	4.6± 1.3	n.s.
嗜好品を控えている	4.7± 1.6	5.3± 1.6	5.2± 1.6	n.s.
食事を工夫している	4.1± 1.1	4.3± 1.1	4.3± 1.2	n.s.
規則正しい生活をしている	3.6± 1.3	4.1± 1.2	4.0± 1.3	*
児に話しかけている	4.1± 1.2	4.3± 1.2	4.3± 1.2	n.s.
児の為に何かいいことをしている	4.1± 1.1	4.0± 1.1	4.0± 1.1	n.s.
用品の準備・計画している	4.9± 1.1	4.8± 1.1	4.8± 1.1	n.s.
出産や育児の話聞く・情報集める	5.2± 0.9	5.1± 0.7	5.1± 0.8	n.s.
母親学級への積極的参加	3.8± 1.2	4.3± 1.3	4.2± 1.3	*
育児の方針を夫婦でよく相談	4.2± 1.1	4.0± 1.2	4.0± 1.2	n.s.
夫以外の他者とよく相談	4.2± 1.3	4.0± 1.3	4.0± 1.3	n.s.
合 計	82.8±10.7	84.4± 9.6	84.0± 9.8	n.s.

妊娠先行群と結婚後妊娠群との比較 unpaired t-test *: p<0.05 n.s.: not significant

†: 逆転項目

表4 夫婦関係

	妊娠先行群 (n=41)	結婚後妊娠群 (n=157)	合計 (n=198)	検定
母親				
恋人同士の気持ち	5.1±1.8	5.3±1.4	5.2±1.5	n.s.
何でもしてあげたい	5.6±1.4	5.5±1.1	5.5±1.2	n.s.
愛していると実感	6.2±1.1	6.1±1.0	6.1±1.0	n.s.
出会う為に生まれた	5.2±1.7	5.2±1.5	5.2±1.6	n.s.
どんなことでも許せる	3.8±1.7	4.0±1.5	3.9±1.6	n.s.
魅力的な男性	5.8±1.2	5.9±1.0	5.9±1.1	n.s.
気持ちを理解してくれる	4.5±1.9	4.5±1.6	4.5±1.6	n.s.
夫の幸せが最大の関心	5.6±1.4	5.5±1.2	5.5±1.3	n.s.
夫の味方でいたい	6.1±1.2	6.1±1.1	6.1±1.1	n.s.
人間として深く尊敬	5.7±1.2	6.1±1.0	6.0±1.1	*
合 計	53.5±11.5	54.1±8.9	53.9±9.5	n.s.
夫				
恋人同士の気持ち	5.6±1.4	5.5±1.2	5.5±1.2	n.s.
何でもしてあげたい	6.0±0.8	6.1±0.9	6.1±0.9	n.s.
愛していると実感	6.4±0.8	6.2±0.9	6.2±0.8	n.s.
出会う為に生まれた	5.6±1.5	5.2±1.6	5.3±1.6	n.s.
どんなことでも許せる	4.2±1.6	4.6±1.5	4.5±1.5	n.s.
魅力的な女性	6.1±1.0	6.0±1.0	6.1±1.0	n.s.
気持ちを理解してくれる	5.1±1.2	5.2±1.4	5.2±1.3	n.s.
妻の幸せが最大の関心	5.9±1.2	6.0±1.1	6.0±1.1	n.s.
妻の味方でいたい	6.3±0.9	6.4±0.9	6.4±0.9	n.s.
人間として深く尊敬	5.8±1.0	6.1±1.0	6.0±1.0	n.s.
合 計	57.2±7.3	57.3±7.3	57.3±7.3	n.s.

妊娠先行群と結婚後妊娠群との比較 unpaired t-test

*: p<0.05 n.s.: not significant

V. 考 察

1. 対象者の特徴について

本調査では、妊娠先行結婚の割合は20.7%であり、平成17年全国平均の26.7%よりもやや低い割合であった。今回、妊娠先行群の年齢は母親、夫ともに結婚後妊娠群よりも有意に若かった。また、妊娠先行群の母親の学歴は結婚後妊娠群に比べて「中学校卒業・高校中退」の人が多い傾向にあった。「出生に関する統計」の概況の報告では、2005年には妊娠先行結婚は「15～19歳」で8割、「20～24歳」6割、「25～29歳」2割、「30歳以降」1割となっており、年齢層が若くなるほど多くなっている。また、先行研究(Pulley, 2002; 上井, 1997)では、意図しない妊娠や望まない妊娠では年齢、教育レベルに関連があったと報告しており本調査でも同様の結果となった。

妊婦健診受診回数については妊娠先行群でも結婚後妊娠群でも差がなかった。福井ら(1999)の調査では、望まない妊娠をした妊婦はそうでない妊婦に比較して妊婦健診回数や母親学級への参加が少ないことが報告されているが、本調査では出産までに受診した妊婦健診回数は2群で差がなかった。これは、本研究が初産婦のみを対象としていることや妊娠先行群であっても望んだ妊娠の割合が多いことが考えられる。よって、妊娠先行群であっても定期的に妊婦健康診査を受診し母子の健康管理を行っていることが明らかになった。

夫の定職の有無は、定職についている夫が妊娠先行群は結婚後妊娠群よりも少なかった。これは先行研究でも、妊娠先行群の夫が正社員でない割合が高いとの報告(近藤ら, 2005)があり、本研究も同様の結果であった。特に、妊娠先行群の夫婦は経済的な面での問題が生じてくる可能性もあり、妊娠期から夫婦の経済状況や今後の生活等について確認し把握する必要があると考えられる。

本研究で、妊娠先行群の複合家族の割合が有意に多かったことは、近藤ら(2005)の先行研究である、妊娠先行妊婦では「自分の親と同居」が45.6%、結婚後妊娠群では「夫と同居」が95.8%で最も多い生活状況であったことと同じ傾向であった。

援助者は2群に差はなく妊娠先行群でも援助者がいることが確認された。岡山(2002)の研究で、妊婦の実母や夫との関係がよいほど、母性役割や妊娠の受容に関する適応状態が良く、胎児への愛着との相関もあることを報告している。本研究で両群とも「夫」ある

いは「実母」を主な援助者にあげていたことから、妊娠先行群でも結婚後妊娠群と同様に望ましい援助者がいることが伺える。

結婚の契機について、結婚後妊娠群ではもともと結婚予定であり時期が適当であったが、妊娠先行群では結婚予定ではなかったが妊娠したために結婚することになったと認識している人が多いことが明らかになった。意図しない妊娠や予定外の結婚の場合、妊娠出産と夫婦としてのスタートが重なり、葛藤やストレスがより多く生じてくることが考えられる。

妊娠判明時の気持ちについて、結婚後妊娠群よりも妊娠先行群の方が嬉しい気持ちが低く、悩んだ人が多いことが明らかになった。大日向(1988)は妊娠中に形成された胎児への姿勢が否定的な場合、その約半数は産後も子どもや自分自身に対して否定的な気持ちを抱きわが子という実感を持つ人が少なく、かわいいと思う時期が遅いことを報告している(大日向, 1988)。妊娠を知った時に肯定的に思えなかった困惑群の母親でも、半数は後に肯定的な態度に変化していると報告されている(大日向, 1988)ことから、妊娠や子どもに対する気持ちは変化していく可能性があるため、妊娠を肯定的に受け止められるように、妊娠したことを共に喜んだり、子どもの準備を一緒にしたりする等、夫や家族など周囲の肯定的態度が重要であると考えられる。

妊娠先行群の母親の対児感情は結婚後妊娠群との差がないことが本研究で確認されたことは、妊婦を対象とした近藤ら(2005)の調査と同様な結果であった。佐藤ら(2004)は初妊婦を対象とした研究で、妊娠後期における母親の胎児に対するattachmentが新生児に対するattachmentに対して影響力があるとしている。花沢(1992)は母子関係が良いグループは接近得点が高く、母子関係が良くないグループは接近得点が低くなると報告している。本研究では、両群ともに妊娠末期から愛着形成がされているため、妊娠先行群の母親も産後にもよい母子関係が育まれることが推察される。

しかし、25歳未満の妊娠先行群の母親では、結婚後妊娠群よりも愛着的な接近感情が低いことが明らかになった。このことから、妊娠先行群で年齢による影響が大きいために示唆され、特に若い年齢層で、児を肯定的に受け入れにくいことが推察される。したがって、特に妊娠先行結婚をした若い母親に対して、児の受容の程度を確認し、前向きに受け入れることができるよ

うにサポートする必要があると考えられる。

また、妊娠先行群の母親は結婚後妊娠群よりも児に対する否定的感情を抱いていないことが明らかになった。花沢(1992)は、回避得点は母子関係が良好なグループの方が低いと報告している。しかし、先行研究(花沢, 1992; 林, 1990; 大嶺, 2000)では回避得点の平均は9.3~9.4点となっており、本調査の結婚後妊娠群の回避得点8.5点が通常の平均よりも高い値とは言えない。一方、妊娠先行群の回避得点は5.8点と先行研究よりやや低く、妊娠先行群の母親は妊娠期では児に対する気持ちがより楽観的であったと考えられる。

母親役割行動について、妊娠先行群の母親は結婚後妊娠群と同様に母親としての自覚や責任を感じており、出産育児に向けて母親役割意識が高まり、母親役割行動もとれていることが明らかになった。しかし、「規則正しい食生活をしている」、「母親学級への積極的参加」は、妊娠先行群の方が実施率は低いことが明らかにされた。望まない妊娠であった場合、母親学級への参加が有意に少なかったという福井ら(1999)の報告と同様な傾向があった。したがって、妊娠先行群の妊婦には妊娠中から出産や育児に向けての関心や意識を高め、身体や気持ちの準備をスムーズにできるよう働きかけることや、母親学級や両親学級、育児サークルなどの集まりに参加していく意義をより強く伝えていく必要があると考えられる。

25歳未満の妊娠先行群の母親では子どものことを考えるとうれしい気持ちや、児に話かけることが結婚後妊娠群よりも少ないことが明らかになったことから、母親役割行動が愛着形成と関連していることが考えられる。そのため、特に妊娠先行結婚をした若い母親に対し、妊娠や出産、母親になることや児に対する受け止めを確認しつつ、妊娠期から児に関心を持ったり児に対して働きかけたりすること大切さを伝えていく必要があると考えられる。さらに、産後の母親や出産経験のある妊婦との交流の場を設けたり、実際に新生児を見たり抱いたりすることを通して、妊娠期から母親になるための準備を促していくことが重要であると考えられる。

妊娠先行群の夫婦の愛情合計得点は結婚後妊娠群との差はないが、妊娠先行群の母親の夫への愛情の中の人間としての深い尊敬としての愛情が結婚後妊娠群よりも有意に低いことが明らかにされた。特に、25歳未満の妊娠先行群の母親では夫婦双方への愛情が低い傾向にあった。中澤ら(2003)は、夫婦関係について、

配偶者への満足度、結婚生活の評価、夫婦関係の親密性という3点を出産前後でみたところ、いずれも妻・夫ともに出産後で低下しており、夫以上に妻の低下の度合いが大きいと報告している。Coxら(1999)は、妊娠中と産後で夫婦別々にインタビューと質問紙調査を実施した結果、計画外妊娠は計画妊娠よりも夫婦ともに結婚に対する満足度が下がる傾向があったことを報告している。そのため、本研究では妊娠末期の両群の夫婦関係に差がなく、良好な夫婦関係であったが、若い妊娠先行群の夫婦は妊娠期から既に結婚後妊娠群よりも低い状態であり、産後は特に妊娠先行群の夫婦関係が懸念される。したがって、夫婦お互いの協力はもちろん、夫の理解を高め援助や協力を得るためにも妊娠期から夫を含めた関わりが大切であると考えられる。夫婦双方が母親、父親としての役割を自覚し役割行動を遂行できるように、妊婦健診や母親学級・両親学級等を活用し、出産や育児について夫婦でしっかりと話し合うことや、夫婦で産後の育児生活やサポート体制の準備を妊娠期から進めていくことの重要性を伝えていく必要があると考えられる。

2. 本研究の限界と今後の課題

本研究は大阪市の1病院1施設、1地域での調査であるため、一般化することは難しい。今回は妊娠末期の調査であったが、妊娠先行群の産後における対児感情、母親役割、夫婦関係について長期的な調査が必要とされる。

VI. 結 論

1. 妊娠先行群の母親と夫の年齢は、結婚後妊娠群よりも有意に若く、妊娠先行群の母親と夫の学歴は、結婚後妊娠群よりも中学校卒業・高校中退者が多かった。また妊娠先行群の夫は定職についている割合が少なかった。
2. 妊婦健診受診回数は、妊娠先行群と結婚後妊娠群との差はなかった。
3. 妊娠先行群にも妊娠出産の援助者がいた。その9割以上が結婚後妊娠群と同様に「実母」か「夫」であった。妊娠先行群の複合家族の割合は結婚後妊娠群よりも多かった。
4. 妊娠先行群の母親の結婚の契機は、7割が「妊娠したため結婚した」、5割が「もともと結婚予定だった」。
5. 妊娠先行群の母親の児への愛着的な接近感情は結

婚後妊娠群との差がなかった。児への否定的な感情は妊娠先行群の方が有意に低かった。しかし、25歳未満の妊娠先行群の母親の児への接近感情や関心は結婚後妊娠群よりも有意に低かった。

6. 妊娠先行群の母親役割行動は、「規則正しい生活」、「母親学級への積極的な参加」が結婚後妊娠群よりも少なかった。
7. 夫婦関係は妊娠先行群の夫婦双方への愛情とも結婚後妊娠群との差がなかった。しかし、25歳未満の妊娠先行群の母親の夫への愛情は結婚後妊娠群よりも低かった。

謝 辞

本研究を進めるにあたり、貴重なお時間を割いて調査にご協力いただきましたお母様、お父様に深く感謝申し上げます。さらに調査の際にご高配いただきました淀川キリスト教病院副院長椋棒正昌先生をはじめ、外来責任者東百合子課長、産科病棟高尾恭子課長、ならびに産科外来のスタッフの皆様には厚く御礼申し上げます。

なお、本研究は大阪大学大学院医学系研究科博士前期課程修士論文の一部である。

文 献

- 安藤智子, 無藤隆 (2006). 妊娠期の抑うつと胎児への感情に関する仮説モデルの検討, 小児保健研究, 65(5), 666-674.
- Cox MJ, Paley B, Burchinal M, et al. (1999). Marital Perceptions and Interactions Across the Transition to Parenthood, *Journal of Marriage and the Family*, 61, 611-625.
- 福井知美, 上林靖子, 中田洋二郎, 他 (1999). 望まない妊娠で生まれた児と母親の精神保健に関する研究, 乳幼児医学・心理学研究, 8(1), 37-52.
- Grussu P, Quatraro RM, and Nasta MT (2005). Profile of Mood States and Parental Attitudes in Motherhood: Comparing Women with Planned and Unplanned Pregnancies, *BIRTH*, 32(2), 107-114.
- 花沢成一 (1992). 母性心理学 (第1版), 東京: 医学書院.
- 林マツノ, 真野真紀子, 羽柴仁恵, 他 (1990). 出産と対児感情の変化について, 母性衛生, 31(1), 48-52.
- 厚生労働省: 平成18年人口動態統計月報年計(概数)の概況.
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai06/index.html> [2007.12.12]
- 近藤由佳里, 大庭智子, 田中智子, 他 (2005). 「できちゃっ

た結婚」妊婦における母性不安と母性意識・愛着形成について—計画妊娠の初産婦と比較して—, 母性衛生, 45(4), 518-529.

Messer LC, Dole N, Kaufman JS, et al. (2005). Pregnancy Intendedness, Maternal Psychosocial Factors and Preterm Birth, *Maternal and Child Health Journal*, 9(4), 403-412.

三澤寿美, 小松良子, 片桐千鶴, 他 (2004). 初産婦の母親役割行動に関する研究—Reva Rubinの妊婦の母親役割獲得過程における概念を用いて—, 山形保健医療研究, 7, 23-31.

三澤寿美, 片桐千鶴, 小松良子, 他 (2004). 母性発達課題に関する研究 (第2報)—妊娠期にあるはじめて子どもをもつ女性の気持ちに影響を及ぼす要因—, 山形保健医療研究, 7, 9-21.

中澤智恵, 倉持清美, 田村毅, 岸田泰子, 他 (2003). 出産・子育て体験が親の成長と夫婦関係に与える影響 (4)—第一子出生後の夫婦関係の変化と子育て—, 東京学芸大学紀要6部門, 55, 111-122.

成田伸, 前原澄子 (1993). 母親の胎児への愛着形成に関する研究, 日本看護科学会誌, 13(2), 1-9.

岡山久代 (2002). 妊婦の胎児への愛着に対する実母ならびに夫との関係の影響—パス解析による因果モデルの検討—, 日本看護研究学会雑誌, 25(5), 15-25.

大日向雅美 (1988). 母性の研究 その形成と変容の過程: 伝統的母性観への反証, 第1版 東京: 川島書店.

大嶺ふじ子, 儀間繼子, 宮城万里子, 他 (2000). 不妊治療を受けた妊産婦の不安と対児感情について, 母性衛生, 41(4), 439-443.

大塚一郎 (1987). 妊産婦の不安と母性意識, 助産婦雑誌, 41(6), 529-535.

Pulley LV, Klerman LV, Hao T, et al. (2002). The Extent of Pregnancy Mistiming and Its Association with Maternal Characteristics and Behaviors And Pregnancy Outcomes, Perspectives on Sexual and Reproductive Health, 34(4), 206-211.

榮玲子 (2004). 妊婦の胎児への愛着形成に影響する要因の検討, 日本助産学会誌, 18(1), 49-55.

佐々木くみ子, 植田彩, 鈴木康江, 他 (2004). 親となる意識の構造とその影響要因に関する調査研究, 米子医学雑誌, 55, 142-150.

佐藤里織 (2004). 初妊婦における胎児に対する attachment (ぎずな) が新生児に対する attachment に及ぼす影響—妊娠初期から出産後1ヵ月までの縦断的研究—, 日本

看護科学会誌, 24(3), 72-80.

上井稔子, 中山栄純, 佐藤千史 (1997). 望まない妊娠に関連する要因について—大阪市浪速区の病院での調査から—, 助産婦雑, 51(12), 72-76.

菅原ますみ (1997). 夫婦間の親密性の評価—自記入式夫婦関係尺度について—, 精神科診断学, 8(2), 155-166.

菅原ますみ, 八木下暁子, 詫摩紀子, 他 (2002). 夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連—家族機能および両親の養育態度を媒介として—, 教育心理学研究, 50(2), 129-140.

常盤洋子 (2003). 出産体験の自己評価と産褥早期の産後うつ傾向の関連, 日本助産学会誌, 17(2), 27-38.